

博士学位請求論文審査報告

2007年2月14日

申請者 許菁娟

論文題目 統戦工作下の文学現象——1970年代後半の台湾現代文学の研究

審査委員 松永正義 坂井洋史 岩月純一

1 本論文の構成

許菁娟氏の博士学位請求論文『統戦工作下の文学現象——1970年代後半の台湾現代文学の研究』は、1970年代後半期台湾の文学状況を、郷土文学論争、柏楊投獄事件、陳若曦評価の3つを題材として、中国共産党の統戦工作に対する国民党の対応の文芸政策への反映、という視点から分析するものである。

本論文は以下の各章から構成される。

第一章 問題の所在

第二章 郷土文学論争に関する考察

- 一 問題の所在
- 二 1970年代初期以来の社会動向と文学界の動向
- 三 「郷土文学」への批判はなぜ出現したのか
- 四 批判はなぜ弾圧へと発展しなかったのか
- 五 結語

第三章 柏楊投獄事件に関する考察

- 一 問題の所在
- 二 「反共」作家柏楊とは
- 三 柏楊はなぜ「親共」の嫌疑で投獄されたのか
- 四 柏楊はなぜ「反共」作家として復活したのか
- 五 結語

第四章 統戦工作下の「陳若曦評価」に関する考察——1977年を中心として

- 一 問題の所在
- 二 陳若曦と『尹県長』について
- 三 陳若曦はなぜ国民党に高く評価されたのか
- 四 結語

第五章 結論

(附論) 台湾現代主義文学をめぐる『現代文学』同人批判についての考察

参考文献

2 本論文の概要

本論文は中国共産党の統戦工作に対する国民党の対応がどのように文芸政策に反映されたかを明らかにすることによって、1970年代後半期台湾における政治と文学の関係を考察しようとするものである。

第一章では、郷土文学論争、柏楊投獄事件、陳若曦評価という、一見なんの関わりもなないように見える文学現象の背後に、中国共産党の統戦工作に対する国民党の対応があり、それがこの時期の台湾分に大きな影響を与えていたことが指摘される。

第二章では、77、78年の郷土文学論争に於いて、郷土文学擁護派の言論は論争以前から一貫していたが、国民党政府は当初こうした「左翼文学」の潮流に対する弾圧を考えていたものの、のちにはこうした「左翼文学」を「反共愛国的」と評価することによって、こうした潮流を自らの側に取り込もうとしていったことが明らかにされる。これまで国民党に対する郷土文学派の戦いとしてのみ叙述されてきたこの論争について、国民党の文芸政策中の矛盾した対応を指摘して、そこに国民党自身の政策の変化を見いだし、この論争を取り巻く政治状況を明らかにした功績は、大きいと考えられる。

第三章では、1968年に「親共」容疑で逮捕、投獄された柏楊が、76年刑期を終えてのちも軟禁状態にあったが、77年に突如釈放され、「中国大陸問題研究センター」の研究員に招聘されたことについて分析する。従来この措置はカーター米大統領の人権外交の圧力によるものとされてきたが、許氏は国民党政府は大陸との関係からむしろ米の人権外交を歓迎しており、柏楊の釈放と「反共」作家としてのクローズアップは、アメリカと中国大陸に対する国民党の統戦工作の一環として考えるべきだと指摘する。

第四章では、66年に大陸へ渡り、74年に大陸をはなれてのち文化大革命の実情を描いて注目された作家陳若曦をとりあげる。陳若曦の小説集『尹県長』出版以前には、この内容を問題視し、発禁にすべきだとする動きがあったが、しかし実際に出版されたのちは、「文革の暴政を暴いた」ものとして高く評価され、国民党政府の主催する「中山学術文化基金会文芸創作奨」を受賞するに至った。許氏はこの背景にも、米中国交正常化へ至る政治潮流の中での国民党の統戦工作の変化を指摘する。

なお附論では、70年代初頭の『現代文学』派への批判を取り上げ、これまで現代主義対現実主義の対立として叙述されてきたこの時期の文学状況を、国民党に近い側からの『現代文学』派批判に注目することによって、より立体的に描写し、そこでの『現代文学』派の文学の自立の主張を評価しようとするものである。

3 本論文の成果と問題点

本論文は1977年という時点を取り上げ、そこでの郷土文学論争、柏楊投獄事件、陳若曦評価という3つの題材から、国民党による統戦工作の文芸政策への反映を明らかにし

た。この時期は米中国交正常化の前夜であり、大陸では文化大革命終了後、開放政策への転換の前夜に当たり、また台湾では70年代の民主化運動の形成から80年代のその本格化に至る前夜でもある。こうした微妙な時期における国民党の政策の、反共政策から、大陸に対する民主主義のアピールへの転換、大陸の統戦工作への対応、といった要素に注目し、その文芸政策への反映が、どのようにここの文学現象に反映しているかを明らかにした。こうした視点はこれまでの国民党の弾圧に対する民主化運動としてのみ叙述されてきた70年代の文学研究に対して、新しい視点を提示するものであり、しかもその分析を当時の豊富な資料にもとづいて説得的に行っている点は、高く評価できる。

しかしながら本論文にはやや荒削りなところがあり、

- 1 これまでの研究史の総括、年表など当然あるべき部分が含まれていない。
- 2 米中関係、大陸でのこの時期の政策動向、国民党内部での民主化に対する対応と政策変化など、背景となる政治動向について個々の場面での指摘はあるが、一貫した見通しとして提示されているとは言い難いこと。
- 3 王拓、柏楊、陳若曦など、取り上げられている作家たちの文学全体の中でのこの時期の意味が分析されていないことによって、より広い視野での政治と文学の問題が、総括されていないこと。
- 4 陳若曦に関する部分はとりわけ書き急いだ感があり、陳若曦の文学と、30年代中国文学、同時期の大陸の文学などとの比較が、指摘に終わっていて具体的な叙述に至っていないこと。

など、より進んだ分析が必要な点多いと思われる。

しかしながら本論文の視点の新しさと、その新しさを生かすだけの資料の博搜と周到な分析は、これらの欠点を補ってあまりあるものと認められる。

以上のことから審査委員一同は、本論文が独創性に富むすぐれた論文であると認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

最終試験結果要旨

2007年2月14日

受験者 許菁娟
最終試験委員 松永正義 坂井洋史 岩月純一

2007年1月22日、学位請求論文提出者許菁娟氏の論文及び関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定めるところの最終試験を実施した。

試験においては、提出論文『統戦工作下の文学現象——1970年代後半の台湾現代文学の研究』に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、許菁娟氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査委員一同は、許菁娟氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。